

童話

水谷年惠

六四

サンタクロースに化けた熊

クリスマス晩に、熊がサンタクロースのお爺さんに化けて、赤い頭巾を被り、白い綿の髻を付けて、枯草を一ぱい詰めた大きな袋を脊負つて、山羊の家へ行きました。兩戸の隙間から覗いて見ると、三匹の小山羊がサンタクロースのお爺さんに、おもちゃを入れて貰ふ靴下を、銘々の枕許に置いて眠つて居ます。熊は兩戸をとん／＼敲いて「開けて呉れ、わしはサンタクロースのお爺さんだよ。」と言ひました。小山羊は皆眼を覺して、「違ふよ、サンタクロースのお爺さんは、いつても黙つて煙突なら這入つて来るよ。」と言つて、又眠つてしまひました。

熊は、これはしくじつたと思つて、そつと山羊の家の屋根へ上りました。そして煙突の口から、まづ枯草を一ぱい詰めた大きな袋を投入しました。袋は籠の中へ落ちました。山羊のお母さんが其の袋へ急いで火を附けました。

袋に火が附いて、枯草がぼつと燃上りました。煙がもう／＼と煙突から噴出して、今這入らうとして居た熊を包んでしまひました。熊は吃驚して屋根の上から飛降り、一目散に逃げて歸りました。

智慧太郎

智慧太郎は赤ちやんの時から頭の毛を剪んだ事がありませぬ。櫛でとかした事もありませぬ。いつでも、もぢや／＼にして放つて置きました。それに智慧太郎は天氣さへ好ければ、いつでも野原

に行つて草の上に寝ました。

葦や蒲公英の種が智慧太郎のもぢや／＼の頭の毛の中に這入り込んで、春になると芽を出し、莖や葉が伸びて花が咲くと、蝶々が舞つて来て花にとまります。野原を歩いて居る智慧太郎の後から頭の上の花を追かけて、あげはの蝶や、もん白蝶が何匹となくひらひらと、ついて行くのを春の間はよく見かけます。

秋になると、智慧太郎の頭の上でも、松蟲や蠶蟲が、チンチロリン、チンチロリン、ガシヤガシヤ、ガシヤガシヤと鳴立てました。

智慧太郎は大層智慧がありました。智慧太郎が「來年は米がとれないよ」と言ひました。來年になつたら大水が出て、米が一粒もとれませんでした。相模が、今相模をとらふとしてゐる時、「きつと東が敗けるよ。」と智慧太郎が言つた通り、西が勝つて東が敗けました。

南の國と北の國とが戦争を始めました。弱い南の國の王様が、智慧太郎にどうしたら強い北の國に勝てるか教へて呉れと頼みました。智慧太郎が

かうすればきつと勝てますと教へて上げました。すると、弱い南の國が大勝に勝つて、強い北の國がめぢや／＼に敗けてしまひました。北の國の王様は自分の國を半分の餘も差出して、やつと生命を助けて貰ひました。

北の國の王様は、口惜しがつて、も一度南の國と戦争して、南の國を敗かしてやりたい。それには智慧太郎を自分の國へ連れて来て、其の智慧を借りるのが一番だと言つて、家來をやつて智慧太郎を連れて來させました。

王様はまづ、智慧太郎に頬べたの落ちる程の御馳走をしました。それから土だらけの着物を脱がせて、美しい立派な着物を着せました。其の次に頭の毛のもぢや／＼を綺麗さつぱりと剃落してやりました。

さてそれから、どうしたら強くなつた南の國を敗してやる事が出来るだらうと聞きました。智慧太郎は、剃立の頭を右に振つたり、左に振つたりしましたが、まるつきりよい智慧が出なくなつてしまつたと言ふことです。